

能楽入門の入門

京都・和の文化体験の日

入門の入門

ディエゴ・ペレッキア

ヒカしたくて
多り住んだ

マンガ
はじめての能楽
魚田南

能楽って
なんだろう?



何ですか？
面白いですか？

能は観るよりもやるのがいい！
内田樹

狂言は現代のコント!?
林宗一郎 × 有松遼一
茂山逸平

能の役割を知る!
能楽ブックガイド
気軽にいきたい
能楽鑑賞

京都市 CITY OF KYOTO

能楽入門の入門
目次

- 2 入門の入門 そのまえに
入門の入門 その1
- 3 能楽ってなんだろう？
- 4 入門の入門 その2
能は「観る」より
「やる」のがいい！
内田樹
- 6 入門の入門 その3
能の面白さって
何ですか？
林宗一郎×有松遼一
- 9 入門の入門 その4
能がしたくて移り住んだ
ディエゴ・ペレッキア
- 10 入門の入門 その5
能楽の役割を知る！
シテ方・ワキ方・囃子方・狂言方
いろんな角度から能楽をみる
装束・能面：この人も能楽が好き！
- 14 入門の入門 その6
狂言は現代のコント！？
茂山逸平
- 16 入門の入門 その7
マンガはじめての能楽
魚田南
- 21 入門の入門 おわりに
能楽ブックガイド
- 22 いざ入門！
京都で能楽を観るなら
気軽に行きたい能楽鑑賞

能楽って なんだろう？

「能」と「狂言」をセットで「能楽」といいます。2001年、ユネスコの「傑作宣言」をうけ、2008年には世界無形文化遺産に登録されました。

能と狂言は、平安中期に成立した「猿楽」の流れをくんでいます。猿楽は、日本に昔から伝わる芸能と、朝鮮半島や中国大陸から伝わった芸能が結びつき、これがさらに、自然神信仰や仏教信仰とも結びついて生まれた芸能です。現在のような上演形式になったのは江戸時代以降のこと。明治になり西洋化が推し進められるなかで、「猿楽」から改称され、「能楽」と呼ばれるようになりました。

能楽の公演では、能を2、3曲と狂言を1曲というセットで行われることが多いです。

のう ムヒ 月に 能の種類……

大きく2種類に分けられます

夢幻能

歴史や伝説の人物を主人公にして、すでにこの世にはいない者の思いを、死後の世界から呼び戻して語る演出手法。世阿弥が生み出しました。

現在能

主人公は現実世界の人物で、物語は時間の経過にしたがって進行。劇的狀況に置かれた人間の心情を描くことを主題とし、対話的な言葉のやりとりが中心になります。

狂言
まじよんげん

セリフとしぐさを中心とした対話劇。滑稽で喜劇的なものが中心。2、3人の出演者で場が成立する身軽さが能とは異なるポイント。近代になってからは、狂言だけの公演も頻繁におこなわれるようになりました。

謡(コーラス)と舞で構成された劇。荘重・悲壮な内容が多い。猿楽がだんだん物語のある劇＝能を演じるようになるのと並行して、猿楽集団が社寺と深く結びつきます。観阿弥のようなスター役者も活躍するようになりました。そして能は観阿弥の子・世阿弥によって大成され、幕府や貴族階級に保護されることによって発展していきました。

ハロー、能楽！
そのまえに……

「古典芸能」「伝統芸能」というと、ちょっとひいてしまおう。「能楽」って、なんだか難しそう、堅そう、と感ずる人も少なくないと思います。「何百年つづいてきた」とか、すごいなあとは思っただけ。せっかく京都にいるんだから、伝統芸能のことを、すこしは知りたいな、興味はあるんだけど。でも、なんにも知らないし、わかんないし。

この「能楽入門の入門」は、そんな「知りたい気持ちはあるんだけど、全然知らないし、なにかから知ったらいいのかもわからない」という人に向けた、入口のさらに入口になるための冊子です。

古典芸能(歌舞伎、文楽、落語etc.)のなかでもとくに、難しそう、と敬遠されがちな能楽。けれど実は、こんなところにも……

映画にも!

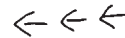
日本映画界の巨匠・黒澤明監督は、能楽の影響をうけた作品を撮っています(『虎の尾を踏む男達』『蜘蛛巣城』『乱』など)。最近だと、『シン・ゴジラ』(庵野秀明監督)のゴジラ役を、狂言師の野村萬斎さんが担当されたことが話題になりました。

この言葉も!

室町時代、能楽の元となる芝居 猿楽などの興行は、人が集まりやすい寺社境内でおこなわれていました。当時は客席などがなかったため、人々は芝生の上に座って見物していたそう。このときの「芝生に居る(座る)」から「芝居」という言葉が生まれました。

能と狂言を一演目ずつおこなう催しを「番組」といったところがはじまりです。

気がつかないあいだに、私たちはさまざまなおで能楽に触れているのかも。でもそもそも、能楽ってどんなものなんでしょう？



能は観るよりやるのがいい!

思想家・武術家の内田樹うちださんは、能をはじめ20年。ぜひ能楽の面白さを伺いたい! と思ったら、「能は、やるのがいいですよ!」と開口二番におっしゃいました。ええっ、それって、どういうことでしょうか?

一生観ないと
思ってたのに

東京にいた40年間、能は一度も観たことがなかったし、一生ご縁がないだろうと思っていました。
神戸女学院大学に来て最初のゼミ生に能楽部の部長がいました。自演会に誘われて、その年の暮れにはじめて能楽堂というところに行きました。がんばってたけれど彼女の出番のときに寝てしまった。「私が出た瞬間に居眠りを始めて、最後まで寝てましたね」と言われまして(笑)。

内田樹
うちだ・たつる
思想家、武術家。神戸女学院大学名誉教授。長年にわたり能を習っており、観世流家元・観世清和氏と『能はこんなに面白い!』という共著も刊行している。

能って、どうやって観ていいかわからなくて。「数を観なきやわかりません」と言われて、次の年には宝生流ほうせいりゅうのゼミ生が入ってきて、あちこちの能楽堂に行くようになってきました。それから観世流を習っているゼミ生の子に、自分の先生が素晴らしいから先生もやりませんかと誘われて、何となく勢いで入門して20年経ちました。
事前の知識も特になく、誰かに手をひ

つばられて気がついたら始めていた。それくらいモチベーションのほうが、長期にわたってお稽古ごとをつづけるうえではいいのかもしれない。

わからなくても大丈夫!

若い人にはぜひ能をお稽古してほしいですね。みんな、「能は敷居が高い」と言います。能楽師の中にも、もっと若い人に観てもらうために「能ってこんなに面白いものなんですよ」と敷居を低くしないと、いけないと思っています。でも、僕はちょっとそれは違うんじゃないかと思うんです。能楽なんて、何をやっていくかわからないものなんです。10年やっても20年やっても、わからない。初心者にわかるはずがない。わからなくていいじゃないですか。わからないままやれば、だから、入門書や解説本には、なかなか意に沿わぬものがあるんです(笑)。僕が言いたいのは、能はわからなくても大丈夫だということです。入門的な知識は要らない。

芸事への入門には鑑賞するのを実践するのかということ二択があると思いますけれど、

ど、能に関してはぜひ実践をお薦めしたいです。
能楽師の安田登あきださんによると、江戸時代に武士が謡うたを習ったのは、一つには基礎的な教養としてなんだそうです。能の200曲には、仏典や漢籍から、中国古代理史、日本古代史・中世史、万葉集、伊勢物語、源氏物語、平家物語とあらゆる題材が入っている。この詞章を諳誦あんじゅうすると、基礎的教養としてはほぼ全方位が網羅もうらされている。能は「謡って覚える百科事典」なんです。

能は「エンタメ」
じゃなく、「生きる知恵」

そういう意味でも能はいわゆる芸能ではないんです。客が喜ぶ演目を出して、集客して、木戸銭を得るというエンターテインメントではないんです。日本の古典芸能には有料公演で成立するものなんてほとんどないんです。市場にニーズがないものなら存在理由がないとすぐにビジネスの枠組みで考える人がいますけれど、芸能はビジネスじゃないんです、もともと。能だって最初は奈良の寺院が勧

進元で始まったものです。そのあと室町将軍や徳川将軍や各藩の藩主たちが能楽師をお抱えにして支えてきた。明治維新で能楽師たちが失職したときには山縣有朋やまがたがパトロンになった。
能は成立以来つねにさまざまな人々の保護によって成立していたものなんです。そういう歴史的な文脈を知らずに、近代の資本主義的な興行の枠組みで古典芸能を論じちゃいけません。
歌舞伎の場合は、観るよりやるほうが面白いという人はあまりいないと思うんです。でも、能は観るよりやるほうが絶対に面白い。
芸能って、発生的にはそういうものだと思います。生活の一部だった。人々の日常生活の中に深く根を下ろして、美的感受性や霊的感受性を育むために工夫された独特のプログラムなんです。あらゆる種の「生きる知恵」なんです。だから、やらないと意味がわからない。やってもなかなか意味がわからないですけど(笑)。とにかくあれこれ言わずにまず習いましょう。

能の面白さって

「林さん、有松さん、何ですか？」

その3
入門の入門

現役の能楽師には、60〜70代、いやいや80代の方も、たくさんいらっしゃいます。けれど、若手にも輝いている方がたくさんいるんです！ 互いに年齢も近く普段から親交も深い、シテ方・林宗一郎さんとワキ方・有松遼一さんに、その魅力を語っていただきました。

なぜ能をはじめたの？

林 僕が能をはじめたきっかけは、家がそういう家系だからせざるを得なかった、というのが正直なところではありま

しやる東京に行って、入門しました。なんにせよ親であれ師であれ、出会いというものが自分の人生を示してくれま

有松 それは、大学院に進んでいたんですが、谷田先生のところ

林 能では、シテ方だけで何か興行を打とうと思

すが、親が上手に

この道に導いてくれたというの大きいです。気がつけば能をやっていて、これ以外のことを何も知らない、できないというような状態になっていたというわけですね。初舞台が3歳のときなんで、記憶にないんですよ。

有松 3歳！ すごいですね。僕は、大学に入るまで能を観たことがないような人間だったんですが、大学で能のサークルに入りまして。

林 そこで、なぜワキ方を選んだのですか？ 僕らの仕事は専門なので、引退するまでずっと同じものをやります。僕は、「もし他にやるなら何がいいか」と聞かれても、ワキ方だけは言いません。座ってなあかんし、じっとしてるのがツラ

大事な存在なんですよ。

いろんな側面があるから面白い

有松 能にはいろんな角度があるのが面白いです。この曲が見たいから「宗一郎さんが舞われるから」「能楽堂に行ってみたいから」とか、足を運ぶ理由がさまざま。曲によって珍しい装束や面が出たりするから、美術という観点で興味を持つ方もいる。本当にいろんなアプローチがあるんだと思います。

林 ワキ方の顔を見るために、観やすい席をキープする人もいます。シテ方は能面で素顔が隠れるけど、有松さんみたいに声も見た目もいい人はとっても大事。

有松 なんと行っていいのかわからないのか……。
林 とも言っても能は「役者」ではなくて、「作品」を見せるものです。スト



林宗一郎

い。

有松 谷田宗二郎先生というワキ方の先生に出会ったことがきっかけです。亡くなられてしまったんですが、謙虚で控えめなんですけど、出るどころは出る、すごく素敵な方だったんです。「この先生につきたいな」と思いました。谷田先生がシテ方やったらシテ方になっていたと思います。

林 なるほど。僕の師匠は父親と、観世流の家元・観世清和先生なんですけど、僕も有松さんと似ていて、舞台を拜見していて「こういう方に習いたい」という気持ちになって。それでお家元のいらっ



有松遼一

ーリーや役者もそうだし、能面、能装束という工芸品、すべてトータルでできあがっているもの。どこから入ってきてもいい世界で、どこから入っても楽しいと思う。これから能を観る人には、舞台上でこうやっているときはこういうことを表しています、ということ以外も知ってもらいたいですね。能をきっかけに着物や和楽器の演奏に興味を持ったり、広がっていく可能性が大いにあると思います。有松 僕は初めて能を観に行ったときに、リアルタイムで進んでいく生の現場で、いい大人が一生懸命汗だくになって真剣に曲に

取り組ん

※シテ方、ワキ方、囃子方、狂言方…P.10～12参照

能かいたくて 移り住んだ

僕は2007年からはじめて日本に来て、2012年から日本に住み始めました。
日本に来る前は、ずっとイタリアで英文学を勉強していました。あるとき黒澤明監督の『蜘蛛巣城』という映画について研究をしようと思いつき、『蜘蛛巣城』は能楽に影響を受けているので、ミラノで能を教えるというワークショップに行きました。すると「謡ってみたいんですけど、それって日本語でやりますか」と言われて。それでやり始めたんですが、当時は日本語も全然できなかったし、日本の文化もあまり知りませんでした。
それからは、今のお師匠である宇高先生の録音テープを貸していただいて、家で常に聞いて真似ていましたね。まだ日本語がわからなかったから、能楽に関する写真を見て、この人はいいな、誰なのかなとか想像力を働かせていました。それが面白かった。全然わからなかったけど、すごく魅力的に見えたんです。



かっこいいなと思った。
日本人の若者には、すでに能楽に対するイメージができていて、そのイメージが多いですね。けれど僕は、そのはじめのイメージがまったくありませんでした。それがよかったのかもしれない。

型に従う、伝統に従うという考え方がなかったから、はじめて「型」というものを見たとき、ちゃんと道が先にあるんだと安心しました。この安心はイリュージョンで、本当はそうじゃないとすこしずつ学んでいくんですが、(笑) いまも毎日、お稽古が楽しいです。

※仕舞…能の一部を面・装束をつけず、紋服・袴のまま素で舞うこと

でいる、必死になってもがいてるというのに惹かれました。挨拶から始まり、師匠との関係、そういった全体的な精神性が舞台につながっていると思うんですけど、そういうところがとても真摯で気持ちよくて、すごく観ていて楽しいですね。
林 あの一、座ってるあいだは、何を考えているのですか？
有松 正直なところを言うと、本当にいいおシテだと、時間を忘れるんですよ。

しっとり、派手、
いろんな種類が

有松 能にも、はじめての人におすめの演目、子どもが観ると喜ぶ演目、ツウの人が観る演目、外国の方に受ける演目、いろいろ種類があります。
林 そこは、なんでもかんでも面白いと決めてかかるのではないほうがいいかもしれません。



林宗一郎
はやし・そういちろう

1979年京都生まれ。能楽師シテ方観世流。父・十三世林喜右衛門、及び二十六世観世宗家・観世清和に師事。

有松 「入門」と言われる曲で多いのは、『船弁慶』『土蜘蛛』『羽衣』あたりでしょうか。
林 選択肢を作ってもいいかもしれませんがね。たとえば、しっとり系が観たい人は『羽衣』、派手なものという人には『土蜘蛛』、しっとり系と激しいのが両方観たいという欲張りな人には『船弁慶』とか。
有松 入門書のようなものにはよく『船弁慶』あたりの名前がいますが、ほかの曲は難しい曲と思われるものもなかなか悔しいもったいない。しっとり系の深い曲になると、たとえば『野宮』などがありますよとか、解説書を作りたいですね。派手なものの中でも『土蜘蛛』がいちばん派手ですよ、みたいに。

好きな曲のはなし

林 有松さんは、個人的にだどの曲が好きですか？僕は『融』ですね。
有松 わあ！
林 かぶった？『融』は、好きな人の人生を動かすくら



有松遼一
ありまつ・りょういち

1982年東京生まれ。能楽師ワキ方高安流。京都大学大学院博士課程修了という研究者でもある。

が多い曲ですね。嵯峨天皇の子どもである、源融という大臣の話です。この源融という人は、多くの人足をつかう贅沢者であり我儘な上人なだけでも、憎めなくて、自分が関係している場所に、亡くなってから幽霊になって出てくるんです。それで、自分の過去を振り返っている。きつと自分も死んだらそうするだろうな、そうやって出てくるんだろなと思えます。すごく好きな曲ですね。
有松 ぼくは片山慶次郎先生がされていた『融』を観たとき、曲が終わった後もしばらく客席で動けなくなったことがあって。涙が止まらなくなりました。すごかったんです。でも、『融』を観ると必ずそうなるかと言われるとそうではない。それがまた能のいいところだと思います。毎回感動した、全米が泣いた、みたいな感じじゃなくて。そういう経験って、数百回に一回とかです。でも、その一回がその人の人生を動かすくらい、強いエネルギーをもっているよ。

能楽の役割を知る!

その5
入門の入門

はやし かつ

囃子方

能の音楽は笛、小鼓、大鼓、太鼓の四つの楽器(四拍子)によって演奏されます。演奏はひとり一役で、自分の担当以外を演奏することはありません。打楽器奏者は、楽器を演奏するだけでなく「ヤ」「ハ」「イヤー」など掛け声をかけてリードをとり、曲のテンポや強弱を確認しながら演奏をしています。

◎笛(能管) メロディーを演奏

◎小鼓 軽快なリズムを刻む打楽器。麻ひも(調べ緒)で締め具合を変えて、音色を調整

◎大鼓 強く高い音色の打楽器。小鼓より皮が硬くて厚い

◎太鼓 2本のバチを使い、バチの扱いによって音を打ち分ける



こうけん
後見

シテ方

シテというのは、主役のこと。面をつけて演じます。主役を演じる専門の能楽師のことをシテ方といいますが、シテ方には主役以外にも様々な役割があります。

たとえば、謡(コーラス)のパートを担当する「地謡」もシテ方の役目。主役でも演じている人の後ろで、補助をしたり、緊急の場合に代わりに演じるこ

とができるよう控えている「後見」も基本的にはシテ方です。

ときには、演目によって使われる舞台装置(作り物)も作ります。公演のたびに作られ、終われば解体されるそう。また、公演の配役を決めたりするのもシテ方の役目。主役でもあり、プロデューサーでもあり、舞台美術でもあるんですね。

じうたい

地謡



◎流派

シテ方には、観世流、宝生流、金春流、金剛流、喜多流の5つの流派があります。観世、宝生、金春、金剛は、室町時代初期の「大和猿楽四座」を源流としています。

ワキ方には、高安流、宝生流、福王流の3つの流派があります。

ワキ方

「ワキ」という役柄を演じる専門の能楽師のこと。シテ(主役)と観客をつなげる進行役のような役目です。ワキは、神職、僧侶、武士など、常に現実に生きている男性の役で登場し、面をかけることはありません。「脇役」の語源でもあります。

多くの曲では、ワキが本舞台に登場し、謡を謡うところからはじまります。シテが幻の存在としてはかなく現れたときも、激しく立ち回っているときも、じっと舞台の角から見つめているのです。

しょうぞく

装束

シテ(主役)は、赤、朱色、青、金……様々な色で彩られる美しい装束を着ています。役のイメージによって分けられており、その柄の意味を知ることによって能の世界も広がるかも。金箔が摺り込まれていたり、総刺繍が施されているためクリーニングはできませんが、なかには何百年と使用されているものもあるそう。

ワキは鮮やかな装束は身につけず、水衣といわれる、老人や僧侶などの日常着を身につけて登場することが多いです。



狂言方



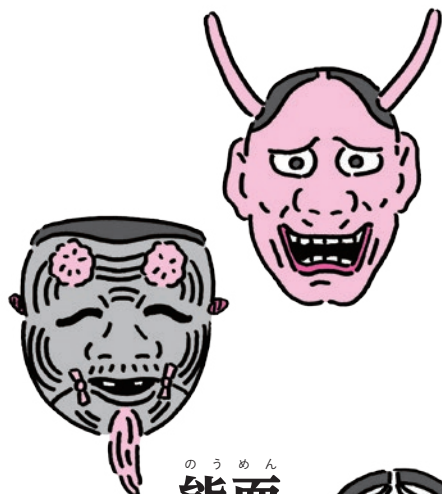
◎流派

室町時代の後期に大蔵流・和泉流・鷺流が成立。幕府直属に大蔵流・鷺流、尾張徳川藩と宮中に和泉流が勤め、明治の西洋化によって幕府お抱えの流派は大打撃をうけてしまい、鷺流は廃絶します。現在は和泉流、大蔵流の二流があり、それぞれの「家」ごとに活動しています。

狂言には、能と異なり貴族や歴史上の人物のような特別な人々ではなく、当時の一般庶民が登場します。その頃の日常的な話し言葉を使っているため内容もわかりやすいのが特徴です。

「間狂言」といって、能のなかに、物語の語り部として登場することもあります。

2、3人で演じられることが多く、大掛かりな舞台やお囃子がなくても上演できることから、明治以降は狂言のみでの公演も増えています。



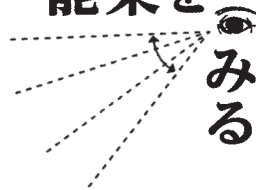
能面

能面の基本形は約60種、小面や若女など若い女性の面や、翁や中將、般若など様々なものがあります。

能面がいつ頃から使われるようになったかは定かではありませんが、日本では古来から、舞は神への捧げ物であり、その演者には神がのりうつるとされていました。能面は、能のなかで神になりきり、変身するための道具として使われてきたと考えられています。どの面を使うかはシテに任せられます。



いろいろな角度から能楽をみる



この人も能楽が好き!

能楽は室町時代～江戸時代にかけて、幕府に庇護される形で発展していった芸能です。織田信長は茶の湯とともに能楽をたしなみ、豊臣秀吉は能楽を観るだけでなく自分も習い演じ、天皇を招いての能楽の会まで催すほど。江戸時代には、徳川幕府が式楽(幕府の公式芸能)としました。

徳川幕府が倒れると、新政府は西洋化を推し進めます。文化芸術においても然

り。能楽はパトロンを失い、盛大なストラにあってしまいます。しかし、欧米諸国は伝統文化を大事にしていることを知った岩倉具視が、「外国からのお客をもてなす芸能として能楽がいい!」と働きかけ、なんとかもちなおすように。かの文豪・夏目漱石も謡を習っていたそうで、当時の教養の一つとして知られていたことがうかがえます。

狂言は現代のコント!?



茂山逸平さん

茂山逸平さんは、1978年生まれ、現在38歳の狂言師。日本舞踊の尾上菊之丞さんとユニットを組んで公演をしたり、いろんな新しい取り組みをされています。その目覚ましい活躍っぷりに惹かれ、お話を伺いました。

狂言だけで食べていけるように

逸平さんはお家が狂言師のご家庭ですが、狂言師になろうと思われたのは？

茂山 高校生のときですね。京都の高校に通ってたんだけど、家業を継ぐために修業に行くから大学には行かないとか、いろんな友人がいて、こいつらに何で勝てるのかなと考えたときに「狂言だけはたぶん負けないだろうな」と。それまでは、朝起きたら朝ごはんを食べるようになって、休日になったら父親の鞆を持って手伝いに行ったり、稽古したりしていました。それをもう少しまじめにやろうと思ったのがそれくらいときかな。僕たちは、なんの保障もないし、お国

が保護してくれているわけでも資格があるわけでもありません。お客さんがチケットを買ってくださって公演ができるからプロなだけで、お客さんがいなくなったらいつでもアマチュアというか、「趣味」狂言」みたいになっちゃう人たち。請われるからプロでありつづけることができる。もちろんそのためには狂言だけで食べていければいいけど、いろんなこともしなくちゃいけません。だから今でも、「いずれは狂言だけで食べられるようになりたいな」ってずっと思っっていますよ。

「伝統」という冠は邪魔

茂山 狂言は、いわゆるシチュエーションコントとすごく近いんです。たとえば「コンビニ」というコントがあるとすると、このコンビニでもいいような作り方をしているんですが、狂言もそう。場所がそんなに特定されるわけでもなければ、キャラクターに固有名詞があるような人が出てくることも少ない。なので、コントとそんなに大差ないんです。着物を着ているとか、昔っぽいしゃべり方をして

いるとかそれぐらいでしょうね。ただ僕らには、古典とか伝統っていう邪魔な冠がついている。古典、伝統のものを観に行く、という方はもちろんすごくありがたいですけど、そこはやっぱりエンターテインメントに能や狂言が特化しきれないのかなと思っています。式楽として守らなくてはならなかった時代が、ついでこの間まであるので、エンターテインメントという観点においてはまだ発展途上な感じですね。

——古典だったり、伝統だったりとかいう冠は、ちよつと邪魔ですか？

茂山 邪魔です(笑)。あったところでなんの得もないです。

——たとえば、「伝統を保護しよう」という流れもあつたりすると思うのですが……

茂山 もちろん、保護されるならされたいです。でも、保護されるならされるなり規制があるでしょう？ それはいやだもん。笑わなくてもいいから伝統を保持しなさいって言われても、知ったこっちゃないです。とにかくお客さんが笑うようにしたいから。

もちろん伝統や古典というものは財産

なので、それを失ってしまえば僕たちの存在価値は一瞬にして崩壊する。ただそこは、お客さんには見えなくてもいいですよ、と思うんです。たとえば、僕が親父から習った伝統的な作品も、お客さんの前に出すときはお客さんが楽しめるものにしていきたい。お客さんは、伝統だの何だのって、別にそんなこと知ったことではない。僕が20年間習ってきたことをそのまま見せたところで、現代のお客さんは楽しめないでしょう。

重く考えず、

構えずに来てほしい

——ということは、伝統だ古典だと、重く考える必要はない？

茂山 そうですね。着物を着ないとダメですか？ と聞かれますが、好きな服でかまいません。そういう楽しみ方もあるんですよ、もちろん。「芝居は観に行く着物を見せたい」という言葉があつたように、そういう文化は重要だと思えます。けれどうちは、2時間笑いに来てくれればいい。観に来たところで何にも変わらないから(笑)。明日から何か変わるとか、

そういうもんじゃ一切ない。とくに訴えかけない。外に出た瞬間に、「何食べに行くと？」と言ってもらえるようなお芝居がベストです。伝統とか古典と言われると、求められているものが多すぎるので、娯楽と考えるともうほうがいいかなと思います。

あと、狂言は時間も短いので。能だと一曲で1時間とかかかるけど、狂言は2時間の間に3つくらい演目があるので、長くても一曲30〜40分で終わります。バラエティー番組1本分を3つ見るくらいと考えるとまあええ方がいいかな。

狂言を観て面白かったし、今度は能に戻ってみよう、落語や日本舞踊に行こうよと、裾野がちよつと広がると嬉しいですよ。和の文化に興味を持つ人が出てくると、和の文化を支えるものにも繋がっていく。たとえばお着物を作ってくくださる方がいると、お着物を作る職人さんがちゃんと次に繋がっていくということになっていく。そういう、京都の地盤を支えてきている伝統産業にも少しずつかかわってくることで、若い方には、いろんなことを知ってもらえればいいなと思っています。

魚田南

初めての能楽

能楽チャリティ公演@ロームシアター京都



能を観るのははじめてなんですけど、何か知っておくと良いことってありますか？

新田はつ 編集者

それなら！

ん？ この「ワキ」さんは何してるの？

ワキさんはそこに居るだけで重要な役なんです。基本的に見てるだけとか話し相手だったりとか。

まずはこの方たちだけでも覚えていけば大丈夫！

一番メインのまふしい。

ワキ

おはやし

おおっ これなら私でも！

いきなり どういうこっちゃ...

そういう不思議な雰囲気も含めて楽しんでください！

ワキ

※イメージです。違います



おはやし かつこいいい...!!

おはやし

おはやし

※魚田はおはやし推しです

スッ...

来ました

メインの「シテ」さんです

しよおお



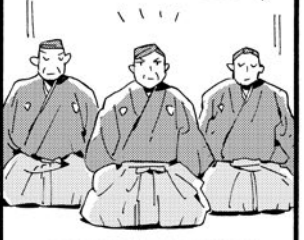
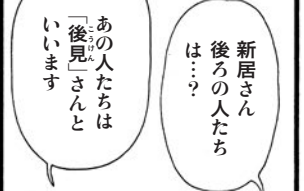
いや、かわいい!!!

かわいい!!!

※一番のオマケさんです

ほろりおしを 見てほしい

びんこはこ 歩く姿を 見てほしい



魚田南 京都に住む漫画家・イラストレーター。著書に「はらへりあらの京都めし」など。

能楽ブックガイド

NOH GAKU BOOK GUIDE

これで「能楽入門の入門」も終わり。
最後に、より能楽を楽しむために、おすすめの本たちを
ご紹介します！



『能はこんなに面白い!』
観世清和、内田樹(小学館)

観世流の家元である観世清和と思想家・内田樹が「能」の本質的魅力について語り合う。能だけでなく、日本の伝統芸術に対する考えや理解がくつと深まる一冊。



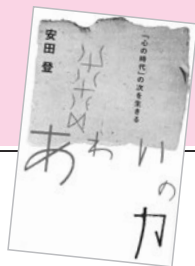
『花よりも花の如く』
成田美名子(白泉社)

若きシテ方能楽師・憲人が主人公。舞台の上では天人にすら変幻自在な憲人の「お能」ライフを描く。九世観世鏡之丞らが監修を務め、曲や用語の解説もわかりやすい。現在15巻まで刊行。



『狂言サイボーグ』
野村萬齋(文春文庫)

狂言師として活躍する野村萬齋によるエッセイ集。「胸で見る」「腰を入れる」「背中中のオーラ」といった身体文化の深淵をつぶさに渉猟。狂言の面白さだけでなく、教育や上達のための一歩にも。



『あわいの力「心の時代」の次を生きる』
安田登(ミシマ社)

能楽師・ワキ方として活躍する傍ら、古代文字の研究も重ね古今東西の「身体知」を知り尽くす著者が、「心」の文字の起源から、次の時代のヒントを探る。



◎「能舞台のママ」知識

舞台との境界

見所(観客席)と舞台のあいだには、「白州」とよばれる、白い玉砂利を敷き詰めたところがあります。江戸時代までは能舞台は屋外にあったため、舞台の足元を明るく見せるために白砂や白石が敷き詰められ、これに光が反射するように工夫されていた名残です。また、橋掛りの白州には松が三本植えられています。舞台に近いほうから一の松、二の松、三の松と植えてあり、遠近感を出すために、一の松が最も背が高く、少しずつ低くなっていきます。

建物のなかに
屋根がある!

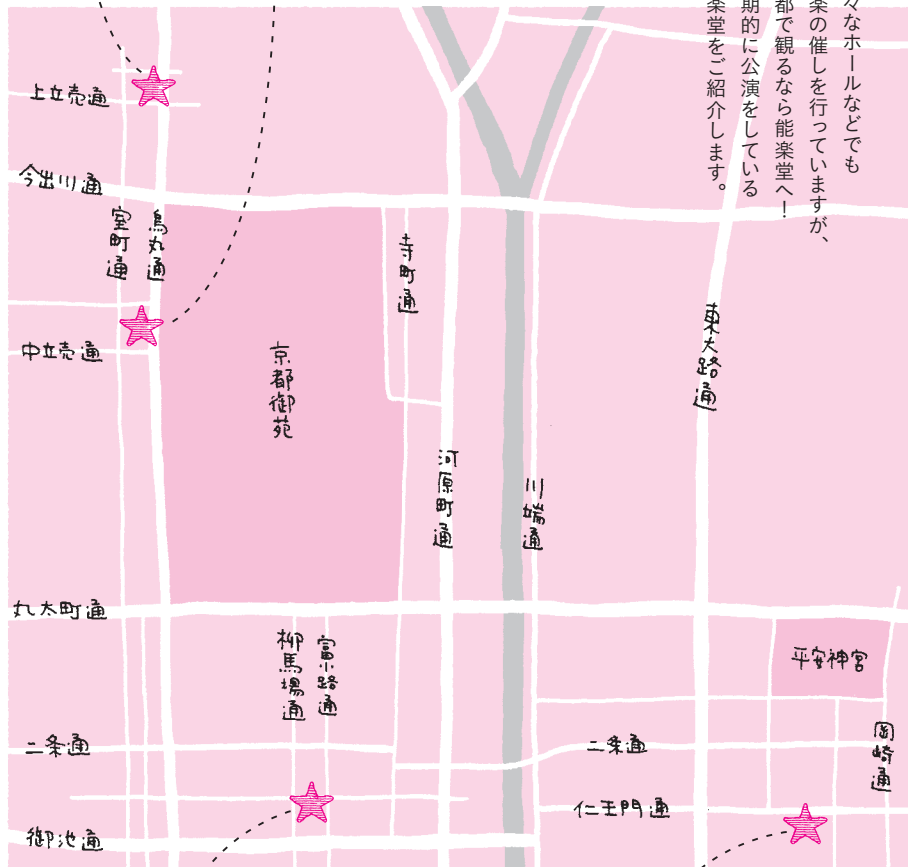
能舞台は、建物のなかに屋根のついた建物があるという不思議な作りになっています。これは、もともと能舞台が野外にあり、能が野外で演じられていた名残です。屋内に能舞台が作られることになったのは明治以降のこと。

背景はなんで
松なの?

能楽の舞台の背景といえ、松の木。これはもともと、舞台正面先にあると想像される「影向の松」(春日大社に実在する松)が鏡に写ったと見立て、模して描かれたことがはじまりとされています。背景の板を「鏡板」と呼ぶのはこのためです。松の木には神様が宿るといふことから、変わることはない背景として描かれているんだそう。

京都で能楽を観るなら

様々なホールなどでも能楽の催しを行っています。京都で観るなら能楽堂へ！定期的に公演をしている能楽堂をご紹介します。



河村能舞台
京都市上京区烏丸通上立売上ル
柳園子町320-14
TEL: 075-451-4513



金剛能楽堂
京都市上京区
烏丸通中立売上ル
TEL: 075-441-7222



大江能楽堂
京都市中京区
押小路通柳馬場東入ル
TEL: 075-561-0622



京都観世会館
京都市左京区
岡崎円勝寺町44
TEL: 075-771-6114

定期的に開催中!

気軽に行きたい 能楽鑑賞

◎能楽

京都では、定期的に能楽の公演が行われています。たとえば京都観世会館や金剛能楽堂では月に一度程度の定期公演が行われています。学生の方は一般の3分の1〜半額程度の料金で観られます。

◎狂言

狂言だけをたっぷり観たい！という方には、狂言会がおすすめ。京都市では1957年より、大蔵流茂山家の協力のもと、年に4回「市民狂言会」を実施しています。夏には子どもや初めての人の向けの回も開催されています。また、狂言と日本舞踊、長唄や清元とコラボレーションした会、新作狂言の会など新しい取り組みもたくさんあります。

行ってみたい！ 季節の催し

京都では、季節毎の公演のほか、様々な年中行事で能楽を観ることができます。

- 1月 京都能楽会 平安神宮初能奉納**
日時◎ 1月1日
場所◎ 平安神宮
内容◎ 毎年元旦に平安神宮で行われる新年の奉納。豪華な演者らによるお正月らしい演目を無料で楽しめる。
- 2月 同明会能**
日時◎ 2月下旬
場所◎ 京都観世会館
内容◎ 能楽の音楽を担当する「囃子方」の団体。京都能楽囃子方同明会が主催する、全国でも珍しいこだわりの能楽公演。
- 6月 京都新能**
日時◎ 6月1日、2日
場所◎ 平安神宮
内容◎ 野外に特設の能舞台が設置され、遠方からも人が訪れる。
- 7月 面白能楽館**
日時◎ 7月下旬
場所◎ 京都観世会館
内容◎ 大人から子どもまで幅広く楽しんでもらうことを目的とした初心者向けの公演。所作や道具の体験なども。
- 8月 大文字送り火能〜蠟燭能〜**
日時◎ 8月16日
場所◎ 金剛能楽堂
内容◎ はじめて能を観る人にもわかりやすい人気曲を選曲。終演後には、京都御苑より大文字の送り火が見られる。
- 9月 上京新能**
日時◎ 9月下旬
場所◎ 白峯神宮(雨天時 金剛能楽堂)
内容◎ 昭和40年から毎年実施されている上京の秋の風物詩。
- 10月 京都観世能**
日時◎ 10月第4日曜
場所◎ 京都観世会館
内容◎ 京都観世会が行う年に一度のスペシャル公演。東京の名家からも演者を招いて大曲・秘曲を上演する。
- 11月 伝承の会**
日時◎ 11月上旬
場所◎ 京都観世会館
内容◎ 若手能楽師たちによる公演。来場者がサポーターになれる制度も。

京都 和の文化 体験の日

若い人にもっと日本の伝統文化に親しんでほしい！
という思いで京都市が実施する「京都・和の文化体験の日」。今年は「能楽」をテーマに、様々な場所でイベントを行います。どれもはじめてでも楽しめる内容なので、ぜひ気軽に参加してください！

はじめまして 能楽

落語家・桂吉坊さんが能楽のあらすじや楽しみ方をわかりやすく面白く解説。シテ方能楽師として活躍する林宗一郎さんらによるダイジェスト版「船弁慶」の上演など初心者でも楽しめる。

日時◎平成29年2月12日(日)

13時半～

場所◎先斗町歌舞練場

京都市中京区先斗町通三条下ル

京阪「三条駅」徒歩5分

参加費◎無料

定員◎350名

裏能 ——これも能楽!?

かつての能楽は、現在のライブやカラオケのようなものだった!? 場所やシチュエーションを現代のユース・カルチャーに引き寄せ、能楽の「裏」にあるサバカル的な面白みを発掘するトークイベント!

日時◎平成29年1月28日(土)

15時～

場所◎METRO

京都市左京区川端丸太町下ル

恵比須ビルB/F

京阪「神宮丸太町駅」2番出口の階段途中

参加費◎無料

定員◎70名

伝統工芸ワークショップ

能でも使われる伝統工芸品「京くみひも」が手作りできるワークショップ。74品目の京都の伝統工芸品を間近で見られるガイドツアーつきで、匠の技にどっぷり浸れます。参加すれば能がちょっと身近に感じられるかも。

日時◎平成29年1月14日(土)

13時～/15時半～

場所◎京都伝統産業ふれあい館

参加費◎2000円

定員◎各回20名程度

◎申込方法

「はじめまして 能楽&裏能」

平成28年12月16日(金)～平成29年1月15日(日)

京都いつでもコール ※おかけ間違いない! 注意! たぐら

TEL 075-661-3755 / FAX 075-661-5855

<http://www.city.kyoto.lg.jp/sogo/page/0000012821.html>

※申込多数の場合抽選となります。

「ワークショップ」

平成28年12月1日(木)～平成29年1月11日(水)

ホームページの専用申込フォームからお電話でも申込みください。

https://sc.city.kyoto.lg.jp/multiform/multiform.php?form_id=2504

京都市文化芸術企画課 TEL 075-366-0033

※先着。定員に達し次第受付を終了いたします。

◎イベントや申込の詳細はTwitterやFacebookから調べてください。

Twitter @kyoto_wanobunka

Facebook facebook.com/kyotoWanobunka



●この印刷物が不要になれば「雑がみ」として白紙回収等へ

